日本経済新聞
2016年（平成28年）12月26日（月曜日）

マンホールにGO

自治体の「ふた絵柄カード」収集人気

下水道に理解促す

各地のマンホールのふたの写真や解説を載せた「マンホールカード」が静かな人気を集めている。無料でもらえるもののご当地に行かないと手に入らず、絵柄も豊富な点が収集意欲をそそっている。社会の重要なインフラである下水道事業への理解を促し、観光活性化にもつながるとして配布を始める自治体数は100を超えた。

古刹や紅葉描く

奈良県斑鳩町の法隆寺近くの観光案内所「法隆寺iセンター」には1日、開館時間の午前8時半から多くの人が詰めかけた。お目当ては同日配布を始めた、古刹や紅葉が描かれたご当地のマンホールカードだ。

「色々な絵柄があって、実際にその町に行かないともらえないのが魅力」と、笑顔でカードを受け取った同県大和郡山市の会社員、難波隆史さん（47）は話す。自転車で関西一円のカードを集め、ふた自体も見て回っているという。同センターの担当者は「予想外の好評ぶりだった。カードの配布が街歩きを楽しんでもらうきっかけになれば」と期待する。

各地のマンホールカードを集める人が増えている（大阪府東大阪市の鴻池水みらいセンター下水道ふれあいプラザ）

109団体が配布

カードは国土交通省や下水道関連企業などでつくる団体「下水道広報プラットホーム」（GKP）が企画した。希望する自治体を募ってカードを作り、4月にまず28自治体が配布を開始。12月には109自治体、120種類まで増えた。近畿はオレンジ、関東は青に色分けし、ふたの設置場所の緯度経度を記すなど、集めるだけでなく実際に見に行きたくなるよう趣向を凝らした。

GKP企画運営委員の山田秀人さん（41）は「ふたは絵柄のおもしろさだけでなく、つまずかず滑らないよう工夫もされている。日本が世界に誇れる文化物だ」と力を込める。

発行の目的は、社会の重要インフラながら地味な存在の下水道への理解を広げることにある。全国で敷設から50年以上経過した下水管はまだ2%（2014年度末時点）にとどまるが、今後、適切な維持管理や更新が進まなければ衛生的で快適な生活への影響や道路陥没などの危険が生じる。

大阪府や大阪市、神戸市などは下水処理場やPR施設の来場記念にカードを渡している。府の処理場「鴻池水みらいセンター」（東大阪市）が8月に府のゆるキャラ「もずやん」の絵柄のカードを配り始めたところ、11月までの4カ月間で北海道や九州からの来訪者を含む666人が見学。15年度の48人を大きく上回った。

配布時にはトイレに紙以外のものを流さないことなど、下水道や処理施設の維持への協力も呼びかけている。担当者は「カードは下水道に目を向けてもらう『入り口』のツールとして役立っている」と話す。GKPは来年度、収集用のアルバムを導入予定だ。現在41都道府県の配布を全国に広げることも目指すという。

特産品・名所など1万の図柄

マンホールのふたは、業界団体「日本下水道協会」の規格で直径約60センチというサイズや強度などが定められている。図柄入りマンホールのふたは約40年前、那覇市で登場したというのが通説だ。1975～76年に沖縄県で開催された沖縄国際海洋博覧会をPRするため、魚をモチーフにした。

下水道への理解を広げたり、地域の特産品や名所をアピールしたりするために全国に拡大。現在は約1700自治体で約1万種類の図柄入りふたがあるという。デザインはメーカーの提案や一般公募、地域ゆかりのデザイナーへの発注などで決められる。